

---

# 足跡たどって

雨月えみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

足跡たどって

### 【Nコード】

N4228F

### 【作者名】

雨月えみ

### 【あらすじ】

花は、元気がとりえの平凡な女の子。そんな花の最近の悩みは、記録更新中の遅刻回数と幼馴染の一平ちゃんのこと。恋にもぐさな女の子のほのぼのラブストーリー。

## Prologue

初めてキスされたのは、確か幼稚園の時だった。

まだ小さかった私は、正直言ってその行為が、よく分からなかったし、どんな風だったかも全然覚えていない。

ただ、あんなことが、あつたなあというくらいの記憶が、残っているだけである。

かくれんぼの時に花壇の裏に隠れた私は、照りつける太陽の光が、暖かくて、ついうとうと寝てしまった。

唇に生温かいものを押し当てられて息苦しさ目覚めた時には、あの子の顔が、目の前にあった。

ただ驚いて何も言えなくて、口をパクパク、目をパチパチと動かす私をあの子は、面白そうに眺めた。

「花ちゃん、今の何だか知ってる？」

当然の如く、私を首を横に振った。

「キスっていうんだって。」

ふうんと私は、呟いた。

「キスをするよ、大好きな人を喜ばせられるんだよ。」

その言葉に私は、ちよつと考えてから答えた。

「一平ちゃんは、私のことが、大好きなの？」

私の言葉に一平ちゃんもちよつと考えて込んでしまった。

「・・・よく分かんない。泥だんごを投げってくる早紀ちゃんより泣き虫の愛美ちゃんより僕の膝の上でよだれを垂らす陽菜ちゃんよりは好きだけど。」

一平ちゃんは、自信なさげに言った。

「じゃあ、間違いだよ。」

「なんで？」

一平ちゃんは、不思議そうに私を覗き込んだ。

「だって、私は、喜んでないもん。」

「そっか。」

一平ちゃんは、ちよつと残念そうに唸った。

「それから、陽菜ちゃんは、桃組さんで、まだ小さいんだから、あんなこと言っちゃだめだよ。」

一平ちゃんは、しまったという風に口を隠した。

「もう言わないよ。だから、先生に言いつけないでね。」

それだけ言い残すと、一平ちゃんは、駆けて行ってしまった。

こんなこと、もうどうでもいい昔の話だけど。

## Prologue (後書き)

ちょっと、息抜きに書いてみました。よかったら、読んでみて下さい。

## Step 1:かわいくないよ

「花！いつまで寝ているの？今日は、遠足でしょう。早く起きないと、バスいつちやうわよ。」

大学時代に声楽をやっていたお母さんの声は、よく響く。

ちよつとふくよかな体を揺らしながら、怪獣みたいな足音を立てて、階段を上がってくると、私の部屋の前で止まった。

「また、お腹出して。風邪引くわよ。」

朝のお母さんは、容赦がない。

夢の中にいる私をかけ布団ごとベットから引きずり落として、現実にひき戻す。

「あ、いたたた。」

膝を強打して、床をのた打ち回る憐れな娘を見ても、お母さんは、無情にも、鼻を鳴らすだけだ。

「まったく、いつになったら、自分で起きれるようになるのかしらね。」

「えっと、60歳位かな。年寄りには、早起きだっというし。心配しなくても、半世紀もすれば、さすがに私だっ。」

働かない頭で答えると、お母さんは、深いため息をついた。

まったく、最近のお母さんてば、悲観的過ぎると思う。

でも、花みたいに可愛らしい子になりますようにって名づけた娘が、こんなんじゃ、悲観的にもなるかな。

お母さんに引きずられて、なんとかやってきた洗面所で歯を磨きながら、鏡を覗き込むと、特大の鳥の巣頭の女の子が、寝ぼけ眼でこちらを見ている。

時計を見ると、8時7分を指していた。

頭の中でタイマーが、回りだす。

着替えに1分と朝ごはんに5分と学校まで走って15分。

勢いよくうがいを済ませた私は、頭に水をかけると、フックから、毛糸の帽子を取ると、頭に被った。

くしもドライヤーも必要なしの奥義である。

広げた新聞を持ったまま、啞然として娘を見つめているお父さんを尻目に納豆ご飯をかきこみ、味噌汁を流し込んだ。

見かねたお母さんが、用意しておいてくれたリュックサックを玄関で受け取れれば、後は走るだけ。

遅刻ぎりぎりの通学路は、人通りも少ないので、あっという間に学校に到着である。

「おはようございます!」

遅刻の焦りも感じさせない爽やかな笑顔で挨拶すると、担任の綿貫先生は、大きなため息をついた。

今日は、二度目である。

朝から失礼しちゃう。

「出発三十秒前だ、小糸。」

「ありがとうございます!」

「でも、点呼を取りたいから、五分前に集合だと言ったはずだが。」

綿貫先生の顔は、いつもにこやかなだけに妙な迫力がある。

「明日から・・・。」

「一週間罰そうじ。」

今度は、私が、ため息をついた。

「分かってきたじゃないか。」

「そりゃ、もう1.5ヶ月も掃除し続けてますからね。」

「もうそんなにか?記録更新中だな。」

感心したような綿貫先生の声が、また癪に障る。

何か言っただろうとして、口を開いた時だった。

「綿貫先生。3組は、バスに乗り終わりました。4組もどうぞ。」

声変わり前の男の子特有のちょっとハスキーな声が、私後ろから聞こえた。

よく知っている声だから、振り向かなくても、誰か分かる。

「お、ありがとうございます。」

綿貫先生は、片手を挙げた。

「おはよう、花ちゃん。また、遅刻したんだね。」

恐る恐る振り向くと、一平ちゃんは、にっこり笑った。

幼稚園から友達の一平ちゃんのことを、最近、めっきり苦手になった。

完璧なまでの優等生っぷりも5年生になってから脅威の成長スピードで私を追い抜かしてしまった身長も0・2秒差の100メートル走のタイムも、全部鼻につく。

そんな私の気持ちに気が付いているのか、一平ちゃんの状態もどこか嫌味で・・・。

「花ちゃん。それ、わざと?」

「一平ちゃん存在に気がついたクラスの女の子達が、そわそわしながら、こちらを見ている。」

「な、何が？」

今日の私は、完璧なはず。

髪の毛だって。

「リュックサックのチャックが、全開だよ。」

・・・決めた。

もう一平ちゃんとは、口利かない。

## Step 2: まさかね

バスに乗り込むと、すぐに仲良しの若菜ちゃんに奥の座席に引きずり込まれた。

「ちょっと、花。あんた、日吉君とどういう関係なのよ。」

引き込まれた勢いでバランスを崩した私の上へのしかかる様にして若菜ちゃんは、鼻息荒く迫ってきた。

「どうって、別に。一平ちゃんとは、幼稚園が、一緒に同じ町内だけ。」

私の言葉に一瞬若菜ちゃんの動きが、止まった。

「幼稚園！」

突然、若菜ちゃんが、叫んだ。

「同じ町内！」

いつから、聞いていたのか、後ろの座席から、由加里ちゃんが、顔を出した。

「幼馴染！」

由加里ちゃんの隣の由美ちゃんも顔を出した。

「そこまで、昔からじゃないけどね。まあ、そうともいうかな。」

嫌な話題を終わらせたくて、とりあえず、テキストに相槌を打った。

「「「何たる甘い響き！」「」」

三人の悲鳴にも似た高い声が、響いた。

もともと、遠足の日のバスって、とにかく騒がしいから、大声でさえ、ほとんどかき消されちゃうけどね。

「大げさな。しよっぱくはないけど、甘くもないよ。」

前の座席から回ってきた袋には、柿の種の周りにチョコレートが、コーティングされている代物が、入っていた。

どうかなって思ったけれど、辛くて甘いのも意外といけるかも。

調子に乗って一人でポリポリ食べていると、若菜ちゃんに肩を揺すられた。

「ちょっと、花。あんた、せつかくの幸運を無駄にしてるよ。だって、あの日吉一平君だよ。頭いいし、顔いいし、野球も上手。」

「ニートンより馬鹿で、福山よりブサイクで、ハンカチ王子より野球が下手くそな奴のどこがいいの？」

若菜ちゃんは、あからさまに呆れた顔を見ると、ため息をついた。

今日で三回目。

まだ、十時前だよ。

「花ちゃんてば、うける。」

後ろの席からは、由美ちゃんの笑い声が聞こえる。

ふんだ。

皆して、私を馬鹿にして。

「考えてもみなさいよ。うちのクラスだけで、一体何人の子が、日吉君のこと好きだと思っているのよ。」

若菜ちゃんは、説得体勢に入った。

「さあ？」

「8人よ。8人。」

「八チ？」

「そうよ。クラスの女子が、15人だからその内8人ていえば、」

「ひょく。半分以上だね。」

「そうよ。うちの学校は、4クラスあるから、」

「P学園の入試の倍率よりずっと高いわ。」

私立を受験するつもり由加里ちゃんらしい比較の仕方である。

「骨肉の争いだねえ。」

かわいい外見の似合わず、オヤジな由美ちゃんは、ビーフジャーキーを食いちぎりながら、楽しそうに言った。

「そう。愛の戦争よ。」

芝居がかった様子で言い切る若菜ちゃんは、面白いけれど、少女漫画の読みすぎである。

しかも、昔のお母さん世代のやつ。

「じゃあ、私は、永世中立国で。」

いつになったら、他の話題になるのだろうか。

昨日のドラマ見逃したから、誰かにストーリー話してもらおうと思ってたのに。

「」「」だめに決まってるでしょ。」「」

またしても、怒鳴られた。

「そんなのらくらしていて、人生楽しいわけないでしょう。」

ちょっと、断言しないでよ。

「かわいい子が、勝つなんて面白くないじゃない。」

どうぞせ、私は、ブーですよ。

「恋する花ちゃん、楽しみ〜！」

・・・無責任な。

「でもさ、皆は、どうして、私が、一平ちゃんを好きだって思うの？そう見える？」

素朴な疑問をぶつけてみたら、三人とも一瞬黙ってしまった。

「てか、日吉君の方が、花ちゃんのことを好きなんだよね。」

「頭は良いはずなのに行動が、単純だからね。」

「分かりやすくって、かわいいよね。」

三人の言葉に頭を捻る。

「一平ちゃんが、私のこと好き？」

普通にそりゃないでしょ。

そういえば、一平ちゃんは、遠くの私立の中学に行ってお母さんも言ってたし、あと半年もすれば、顔も見なくなっちゃうんだよねあ。

口きかないって決めてたけど、やっぱりやめた。

お別れまでもう少しだもんね。

・ ・ ・ 別に好きだからとか聞いたからじゃないよ。

## Steps:くどいんじゃない

日吉一平は、私の通う小学校では、ちょっとした有名な人である。

その一平ちゃんのせいで、三組の班決めは、パニックになったらしい。

小学校最後の遠足で憧れの人と回りたい、行き先は、遊園地だからあわよくば、コーヒーカップや観覧車で見つめあいたいと目論んだ女の子達は、一触即発の駆け引きを繰り返したそうだ。

結局、五回に及ぶあみだくじと真つ黒な談義の末に決定した班は、一平ちゃんの班だけ男子2人女子4人の偏りっぷりだったらしい。

クラスの男女比は、2:1なのに、3組の男子は、憐れである。

「でも、あれって、扇動的っていうか、一種の伝染病みたいなものじゃない。女子で1番人気の麻由ちゃんが、ちよつといいなって言い出してからでしょ。皆がいいって言うから、かっこよく見えてくるよ。私だったら、前田君のが、百倍カッコイイと思うけどね。」

眼鏡フェチで色白神経質好きの若菜ちゃんは、不満げにピーナッツの殻を飛ばした。

予想以上に飛んだ殻は、三つ斜め前の前田君の頭に当たった。

「じつめ〜ん!」

若菜ちゃんは、先程とは、打って変わった高い声で謝ると、私の腕

を取ると、前田君の座っている席に近寄った。

・・すごいなあ。

うれしいそうに前田君に擦り寄る若菜ちゃんを見て、妙に感心した。

付き合わせた私を放りっぱなしっていうのは、どうかと思うけど。

持て余した私が、手遊びをしていると、肩を叩かれた。

「小糸ちゃんは、初めにどこ行きたい？」

振り向くと、前田君の隣の窓側に座っていた石川君が、通路に出てきて、私の隣に立っていた。

クラスの全員と仲が良くて爽やかなスポーツ少年なのに、変わり種（人のこと言えた性格じゃないけどね。）の前田君と親友なのは、家が隣同士だからということだ。

悪気はないみたいなんだけど、辛辣な言葉を平気で口にする前田君とオブラードに包むムードメーカーな石川君は、結構いいコンビだと思っ。

邪魔者なしで前田くんと回りたい若菜ちゃんの企みにより、私達の班は、四人だけ。

初めから、休むことが決まっていた男子二人を入れて組んだ班である。

二人の世界に入りつつある若菜ちゃんと前田くんは、おいておくと

して、一緒に回る男の子が、気のいい石川君でよかったと思っている。

「うん。とりあえず、人気のある絶叫系から乗りたいかな。多分、並ばないと乗れないと思うし。」

先に配られている園内マップを覗き込みながら、行きたいアトラクションをいくつか指差した。

「うん、いいね。帰りの集合時間が、結構早いから、急がないと乗れなくなっちゃうからね。」

予想通り、石川君は、焼けた顔に人懐っこい笑みを浮かべて、同意してくれた。

「ところでさ、」

そこまで言って石川君が、少し言い難そうに俯いた。

「何？石川君も行きたい所あるなら、言ってね。」

「ええと、そういうんじゃない。そのお、」

石川君の頬にほんのり赤みが差した。

おお、これは。

「小糸ちゃんに頼みがあつて。」

「うんうん。私に出来ることなら、何でも。」

私は、期待をこめて、石川君の言葉を待った。

「実は、俺、間宮のことが、気になってて。その・・・。」

石川君の顔は、ゆでだこみたいに真っ赤になっている。

「分かるよ。由美ちゃん、可愛いもんね。で、私は、何をすればいいの?。」

由美ちゃんかあ、ちょっとハードル高いかもな。

でも、石川君、いい奴だし。

「えっと、ホントごめん。こんなこと、頼んで。その、お弁当と一緒に食べたくて、その・・・。」

「分かった。由美ちゃんに聞いとくよ。とりあえず、最初は、私も一緒にいるけれど、それでもいい?。」

そうじゃないと、由美ちゃんのことだから、素直に来てくれなさそうだ。

「も、もちろん。小糸ちゃん、ありがとう。」

石川君は、ぱつと顔を輝かせると、ほつとしたように座席の一つに寄りかかった。

若菜ちゃんも石川君も他の皆も卒業してもほとんど同じ中学なのに、なんで今焦ってるんだらう?。」

やっぱり、よく分かんないや。

喉が渴いたので、お茶を飲もうと魔法瓶に口をつけると、中にはカルピスが入っていた。

甘酸っぱい恋の味は、私には、ちょっとくどい気がした。

#### Step 4：ヤバイでしょ

「私が、キャラメル味にするからあ、前田君は、チーズ味にして、半分こにしようよ。」

十二歳にしてすでにフェロモン全開な若菜ちゃんは、ねっとりとした声で言うと、前田君の腕に飛び付いた。

「ああ、いいけど。」

クールぶっているけれど、前田君もまんざらでもないようで、二人の周りは、ピンク色オーラが、漂っている。

「あ、あの私は、塩味で。」

ポップコーン売り場の店員さんの口が、へ字になっていることに気が付いた私は、慌てて人気のない味を注文した。

飲み物を待っている二人を置いて一足先に列を抜けた私は、石川君が、待っているベンチへと急いだ。

待ち合わせのベンチに石川君の姿を見つけた私は、走り寄ろうとしたけれど、石川君の隣に座っている人物に気がついて、足を止めた。

「げ。」

会いたくない人ナンバーワン。

道行く人が、ベンチの方をちらりと振り返る。

ドイツ人のお祖母さん譲りの整っていて彫りの深い顔立ちとブラウンの髪は、学校の外に出ても目立っている。

名前は、もろ日本人のくせにクウォーターなんだよね。

「お、小糸ちゃん。お帰り〜。」

邪魔扱いされるの覚悟で、若菜ちゃん達の所に戻ろうと思い、後退りした私に気が付いた石川君が、空気を読まずに声をかけてきた。

も〜、やめてよ。

そりゃ、無視はしないことに決めただけど、こっちにだって心の準備する時間くらいくれたっていいんじゃない。

私の切実なる願いにもかかわらず、一平ちゃんが、振り向いた。

「花ちゃん?」

逆光で顔が見えにくかったようで、一平ちゃんの声は、疑問系である。

できれば、否定したいところだったけど、そういうわけにもいかないので、仕方なく頷いた。

「うん。私達、同じ班なんだ。石川君待たせて、ごめんね。若菜ちゃん達は、飲み物買ってくるから、もう少ししたら来ると思っよ。」

そう言って石川君の隣に腰を下ろした。

「いや、むしろこっちが、ごめん。やっぱり、俺も一緒に行った方がよかったかなとか思ってたんだ。小糸ちゃん一人であるの二人と一緒に緒って、キツイっしょ。」

石川君は、苦笑気味に言った。

「正直ヤバイよ。居心地悪いし店員さんとか、超怖かったもん。」

私の言葉に石川君が、吹き出した。

「何それ。ちょっと見たかったかも。」

「人ごとだと思ってる。かなり怖かったんだからね。」

クスクス笑っている石川君のことを軽く叩いた時、石川君の向こうに座っている一平ちゃんと目が合った。

その時、なぜか一平ちゃんの目は、いつもみたいに馬鹿にしたみたいな笑みを含んでいなくて、いたたまれなくなった私は、目を逸らしてしまった。

「仲いいんだね。」

「……やってしまった。」

一平ちゃんの声は、怒っていないけれど、突き刺さるような視線を感じる。

「おう。小糸ちゃんて、いい奴だよな。楽しいし。日吉って、小糸

ちゃんと幼馴染なんだろ。こんな子と幼馴染なんて、羨ましいよ。」  
仏の石川君の褒め言葉が、くすぐつたい。

「褒めすぎでしょう。てか、石川君。そんなこと、私に言わないで。」

由美ちゃんと言いかけて、石川君に口をふさがれた。

「ちょっと、小糸ちゃん。恥ずかしいから、やめてくれよ。」

石川君は、ヒソヒソ声で抗議してきた。

「どうしたの？」

「一平ちゃんは、怪訝な顔で私達を見た。」

「いや、なんでもないよ。ちょっとね、小糸ちゃん。」

そう言いながら石川君は、私を小突いてくる。

「そうそう。」

ひきつった笑いでなんとか誤魔化した私達を一平ちゃんは、見比べた。

「二人って、さあ。」

「あ、いたいた。お〜い、花〜！」

一平ちゃんの言葉は、若菜ちゃんの高い声にかき消されてしまった。

「待たせてごめんね。お店の人が、飲み物間違えてて。」

・・・それって、わざとだろうな。

不満げに口を尖らせる若菜ちゃんを見て、なんとなく店員さんの気持しが、分かる気がした。

「じゃあ、俺は、戻るわ。」

言いかけた言葉を引つ込めた一平ちゃんは、呼び止める暇もなく、足早に行ってしまった。

「あれ、日吉君じゃん。どうしたの？」

さつき散々騒いでいたわりにやっと一平ちゃん存在に気が付いた若菜ちゃんが、不思議そうに言った。

「班の女子達が、土産屋で動かなくなっちゃったから、つまらなくて抜けてきたんだって。なんか絶叫系も苦手な子が多くて、何にも乗れてないらしいよ。」

そういえば、どうして一人だったんだろうと思った私の代わりに石川君が、答えた。

「は〜王子様も大変だね。その点うちらは、チームワークよくて、楽しいよね。」

若菜ちゃんは、前田君の手をぎゅっと握る。

「うん。」

前田くんも珍しく笑顔で素直に答えた。

わが班の身勝手カップルを見て、私と石川君は、ため息をついた。

ブルブル。

ポケットに入れた携帯のバイブ音が、鳴った。

開いてみると、由美ちゃんからだった。

「石川君、由美ちゃんからだよ。昼ごはんをどこで食べるかのメールじゃない。」

石川君の体が、ビクンと大きく震えたのが、分かった。

「なになに。えっ……。」

「こ、小糸ちゃん。どうしたの？」

内容を見た私が、黙ってしまったので、石川君が、心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「石川君。気を強く持って聞いてね。」

ちよつと大げさな私の言葉に石川君は、唾を飲み込んだ。

「由美ちゃんね。えっと、言いくいんだけどね。・・・お化け屋敷

に並ぶのに時間かかるから、並びながらお昼食べるって言うてる。」

マイペースな由美ちゃんらしいといえば、由美ちゃんらしいけど。

明らかに気落ちした様子の石川君が、かわいそうで・・・。

「あのさ、じゃあ、提案なんだけど。静かなところで完全に二人つきりとはいかないけれど、それでもいいなら。」

がつくりとうな垂れていた石川君が、ぱつと顔を上げた。

「とりあえず、今から由美ちゃんと一緒に並んでお化け屋敷に三人で入って、途中から私が、抜けるっていうのは、どうかな？」

私の提案を聞いた石川君の顔が、明るくなった。

「いいの？小糸ちゃんは、大丈夫？」

「もちろん。」

私は、まかせなさいとばかりに胸をドンと叩いた。

・・・そんなうれしそうな顔をされたらさ。

今更、言えやしないよ。

私の三大嫌いなものが、テストとゴキブリと・・・お化けなんて。

## Steps: ちょっと待ってよ

「へ〜。石川君で、ホラー映画好きなんだ？私もなんだ。大晦日とか、一人で朝まで見てたりするよ。」

最初は、あまり石川君に興味を示さなかった由美ちゃんだけど、石川君の甲斐甲斐しい努力の結果、だんだん友好的な態度を取り始めた。

「え、いや、そこまでは・・・いやいや。そ、そう俺も俺も。」

マイペースな由美ちゃんに涙ぐましいほど、頑張る石川君。

二人の会話が、弾み始めた頃、やっと順番が、回ってきた。

・・・私にとっては、「とうとう」である。

ホラー映画ネタで盛り上がっている二人の後についてお化け屋敷に入った私は、ちょうど隠れやすそうな大きな井戸を見つけた。

「石川君、石川君。そろそろ、私抜けるから頑張ってるね。」

「あ、ありがとう。じゃあ、出たところで待ってるから。」

耳打ちすると、石川君は、少し照れたように頭を掻くと、お礼を言った。

満足げに頷いた私は、二人の声が、聞こえなくなるまで井戸の後ろに隠れていた。

お化け屋敷が、なんぼのもんよ。

ちやっと出てしまえば、怖くない。

良いことをしたと思っただけで気分が乗っていた私は、鼻歌まじりに歩き出した時だった。

「ご機嫌ですね、お嬢さん。いいことが、あつたんですか？」

「うん。私、キューピッドってやつになれそうな感じなんです。」

そう言っただけで、後ろを振り返ると、薄暗がりに浮かぶ女の人が、立っていた。

その顔には…。

指先が、冷たくなって体中の血の気が、引くのが分かった。

自分の声とは、思えない金切り声が出た。

青白い光の玉が、そこら中に浮かぶ通路を必死に走った。

運の悪いことにそのお化け屋敷は、迷路仕立てになっていて、闇雲に走れば走るほど、迷い込んでしまう仕組みになっていた。

どれぐらい走っただろうか。

半泣き状態の私の前に突然何かが、現れた。

「ギャー！」

つんざくような響き渡った。

完全に我を失った私は、目の前の影を必死に叩いた。

「イテ！おい、ちよっ、やめろよ。」

焦ったような声にやっと自分が、叩いていたものが、人間の胸だと理解した私は、恐る恐る顔を上げた。

その先にある顔が、さっきまであんなに見たくなかったはずなのに今はそこにあるのが、多分他の誰より当然だと思える自分を悔しくて情けなく思った。

「落ち着け。俺だよ。お化けじゃない。」

一平ちゃんは、胸に置かれた私の手をとると、そつと握った。

その握り方は、意外にもとても優しくかった。

ほっとしたのと同時に立っていられなくなった私は、その場へたりこんでしまった。

「ど、どうして？」

「外で石川達に会ったんだよ。お前が、遅いって心配してた。ったく、なんで一人になるんだよ。お前って、ホント考えなしだよな。」

座り込んでしまった私の前にしゃがみ込んだ一平ちゃんは、呆れた

よつじに言った。

「じ、ごめん。」

普段だったら、払いのけるはずの一平ちゃんの手を締るよつじに両手でギュッとにぎりしめた。

「とりあえず、出るぞ。立てるか?」

一平ちゃんは、私の手を握ったまま、立たせようと引っ張った。

「…無理っばい。」

腰が、抜けてしまったらしい。

一平ちゃんの手を開放した私は、未だにぶるぶる震えている両手を地面について、なんとか立ち上がるうとしたけれど、地面を這うことしか出来なかった。

「しょうがねえな。おい、ほら。」

一平ちゃんは、ため息をつくとき、私の前にしゃがんだ。

「な、何?」

「立てないんだろう。乗れよ。おぶって行ってやるから。」

そう言っつて、一平ちゃんは、首を傾けると、背中を示した。

「悪いから、いいよ。私、重いし。ちょっと休んだら、立てると思

うから。」

慌てて首を振ると、一平ちゃんは、またしても呆れたように私を見た。

「そんなこと言ったら、日が暮れるぞ。お前の班の奴らだって、心配してんだ。ちょっとは、人のことも考える。」

一平ちゃんの言葉も一理あるけど、そんなこと言っただって・・・。

「それに重いのは、見れば分かるから今更だろ。それでも、運んでやるって言ってるんだから、素直に乗ったら？」

一平ちゃんは、小ばかにしたように鼻で笑った。

「ちょっと、何それ！乙女に言う言葉じゃないよ。デリカシーなさすぎー！」

「はいはい。ガタガタうるさいよ。」

私の抗議の言葉をハエを追っ払うようなそぶりで流した一平ちゃんは、立ち上がると、座っている私を持ち上げると、小脇に抱えた。

「ちょっと、何すんのよ！下ろして。」

「いつまでも不毛な争いしても意味ないだろう。仕方ないじゃないか。」

一平ちゃんは、私を抱えたまま、ずんずん歩いていく。

「だからって、こんな荷物みたいに運ばなくなっただっていいじゃない。恥ずかしいから、やめてよ。」

「自分が、おんぶじゃ嫌だって言ったんだろ。」

「この方が、もつとやだ。」

一平ちゃんは、ため息をつくと、私を下ろした。

「じゃあ、ずっとここにいれば。怖いお化けと一生暮らすっていうのも楽しいかもな。」

「ちょ、ちょっと。」

そりゃあ、一平ちゃんの小脇に抱えられるのもおんぶされるのも嫌だけど、こんなところに一人で置き去りの方が、もつと嫌だ。

「なにせ、お化け屋敷だ。白骨死体が、一つ増えたところで誰も気が付かないだろうな。」

「悪い冗談やめてよ。」

「達者でな。俺も後七十年もすれば、そっちに逝くから。」

一平ちゃんは、笑顔で言うと、私を置き去りにして一人ですたすた歩き始めた。

「ちょっと、待って!」

思わず、叫んでしまった。

「一平ちゃんの足が、ピタリと止まった。」

「の、乗せていって下さい。」

悔し紛れに言うと、一平ちゃんは、くるりと向きを変えて私のところに戻ってきた。

「はい、了解。最初から素直にそう言えばいいのに。」

「・・・すみません。」

無条件降伏した私は、大人しく一平ちゃんの背中に乗った。

その後、しばらくは、二人共黙って歩いてけれど、やがて一平ちゃんが、ぽつりと言った。

「さっきの花ちゃん、まじ必死だったよね。」

「やっき？」

「うん。俺のこと、お化けかと思って殴ってきた時。俺、殺されるかと思っただもん。」

だんだん一平ちゃんの体が、震えてくるのが、伝わってきた。

「別に笑い堪えなくていいよ、一平ちゃん。どうせ、私は、馬鹿ですから。」

私の言葉にとうとう耐え切れなくなったのか一平ちゃんは、笑い始

めた。

「本当に命の危険を感じたんだからね。」

言い訳がましく言ってみると、一平ちゃんは、頷いた。

「知ってるよ。小三の時、町内の肝試し大会で大泣きしてたもんな。」

「よく覚えているね。あの時は、飯島さんちの恵美姉ちゃんが、本物みたいに怖かったから。」

今でも夢に見るほど怖かったなんて言ったら、もっと笑われそうだ。

「確かに恵美さんの口裂け女は、怖かったな。俺でも結構驚いた気がする。」

私と一平ちゃんは、出口までずっとそんな昔話をしていた。

その間は、なぜか全然怖くなかったし、一平ちゃんの口調が昔みたいに乱暴な感じに戻っているのも無性にうれしかった。

出口が見えたとき、実は、ちょっとだけもう少しお化け屋敷が続けばいいのにかと思ってしまった自分もいたり・・・。

## Step 6: たまにはね

「花ちゃん！」

お化け屋敷を出ると、待ち構えていた由美ちゃんに抱きつかれた。

「心配したよ。それもこれも石川君が、頼りないせいだからね。」

由美ちゃんは、私に抱きついたまま、石川君をじろりと睨んだ。

落ち込んでいる石川君を見るにどうやら、作戦は、失敗らしい。

「ごめん、小糸ちゃん。俺、小糸ちゃんが、お化けが苦手だったって知らなくて。」

飼い主に叱られた子犬のような顔で石川君は、私に謝った。

「うっん。ちゃんと、話しておかなかった私が、悪かったんだよ。由美ちゃんもごめんね。心配させて。」

そう言って、由美ちゃんの柔らかい髪に顔を埋めた。

「花ちゃんが、無事ならいいんだ。それから、石川君が、反省を態度で示してくれるそうです。」

いきなり、機嫌が良くなった由美ちゃんは、石川君に目配せした。

「ソフトクリームをおごらせていただきます。」

もう既に二人で話し合っていたようで石川君は、間髪入れずに言う。それでも、仲良く売店にソフトクリームを買い行く二人の後姿を見て、ある意味作戦は成功したのかかもしれないと思った。

二人の姿が、見えなくなると、私は、一平ちゃんと向き合った。

「あのだ。一平ちゃんは、私のこと好き？」

その言葉は、思ったより、ずっと簡単にするりと私の口から出た。

それは、多分、なんとなく答えが、分かっていたからで。

「何だよ、急に。」

一平ちゃんは、怪訝そうに私を見た。

「いや、ただ聞いてみたかっただけ。私のこと好き？」

もう一度聞いたら、一平ちゃんは、ちょっと考え込んだ。

「よく分かんないけど。班を決めるのにうだうだ時間がかかるやつとかジェットコースターが乗れないやつよりは、ましかも。」

「あっそ。」

予想通りの返事に私は、ほっとしたようながっかりしたような複雑な気分だった。

昔とほとんど変わってないよね。

「そっちは、どうなんだよ。」

なんとなくしんみりした気持ちで物思いにふけていた私を一平ちゃん言葉が、現実に引き戻した。

「私？」

「そっだよ。最近、避けてばかりで感じ悪い。」

驚いて聞き返すと、一平ちゃんは、ちょっと不機嫌そうな声で言った。

「別にそんなつもりじゃなかったんだけど。」

しどろもどろに言い訳した瞬間だった。

「じゃあ、どういつつもりだったんだよ！」

聞いたこともないような怒鳴り声が、上から降ってきた。

「ちょっと、一平ちゃん。皆見てるって。私が、悪かったから。謝るから、今日はやめよう。」

通り過ぎる人達からの視線が、痛い。

もし学校の子に見られたら、後で何を言われるか分からない。

「俺のこと、嫌いなんだろう。」

一平ちゃんの感情を殺した低い声に私は、驚いて顔を上げた。

「ち、ちがうよ。」

「じゃあ、なんで避けてたんだ？」

一平ちゃんの顔が、近づいてくる。

じりじり迫ってくる一平ちゃんに私は、思わず、後ずさりすると、小声で答えた。

「だって、最近一平ちゃんが、別人みたいだから。」

「は？」

一平ちゃんは、驚いたのが、分かった。

恥ずかしかった。

だけど、今更止まらない。

「口調も気取った優等生みたいだし会うたんびに嫌味言うし、身長だって、昔は私の方が、大きかったし、足だって、私の方が、速かったのに。最近の一平ちゃんて、ちっともかわいくないんだもん。」

興奮と恥ずかしさで頬が、顔が燃えるように熱くなるのを感じた。

急き切ったようにそれだけ言うと、その場を逃げ出そうとした私の腕を一平ちゃんが、掴んだ。

「くだらない理由だよ。もういいでしょ。離してっば。」

振り払おうとしたけれど、一平ちゃんの手は、びくともしない。

やがて、一平ちゃんの肩が、震えているのに気が付いた。

「ふっ。」

とうとう耐え切れなくなった一平ちゃんが、吹き出した。

「あはははは。ホントくだらない。お前、そんなことで俺を避けたの?」

お腹を押さえてヒーヒー言いながら、一平ちゃんは、私を見た。

「しょうもないって思われても仕方ないけど、腹が立ったんだもん。」

逃げ出そうとする私の肩を一平ちゃんは、両腕でがっちり押さえつけた。

「それって、ひがみだろ?何だっけ、俺の方が、背が高くて、足が速くて、顔がいいからだっけ?」

「顔がいいなんて言ってないよ!ちょっと、ちやほやされているからって、自意識過剰もいい加減にしなよ!」

腹立ちまぎれに反論した時、合流しに来た若菜ちゃんと前田くんの姿が、目に入った。

若菜ちゃんにこんな姿見られたら、後で何を言われるか分かったもんじゃない。

それにこれ以上、『みんなの日吉君』と一緒にいるのも気が引ける。

「そうだ、一平ちゃん。助けてもらったお礼にいいこと教えてあげる。」

「何だよ？」

突然ころりと態度を変えた私を一平ちゃんが、ちよつと驚いたように見た。

「一平ちゃんの班の女の子達は、多分ジェットコースターに『乗れない』んじゃないよ。」

「は？それって、どういう意味？」

「そのままの意味。だからさ。『俺、ジェットコースターに乗りたんだけど、誰か隣に座ってくれない？』って言うてごらん。少なくとも、四回は、乗れるよ。」

班の女子が、順番に一平ちゃんの隣に座るから四回。

意味が分からないという顔をしている一平ちゃんに最後に忠告した。

「一平ちゃんも自分のしたいことをちゃんと言わなきゃ分かってもらえないよ。一平ちゃんが、なんでも『はいはい』頷くから班の女の子だって、それでいいのかなって思うて分かってる？ちゃんと言えば、その子達は一平ちゃんに喜んで欲しいって思ってるんだか

ら、ちゃんと考えてくれるはずだよ。レディーファーストも行き過ぎると、失礼だから気をつけてね。」

一気にそれだけ言うと、呆然としている一平ちゃんを置いて、待っている若菜ちゃん達の方へ駆け出した。

言いたいこと言っちゃったけど、たまには、いいよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4228f/>

---

足跡たどって

2010年10月28日03時12分発行